見通しが立ちにくい未来を生きる

新聞に、お弁当屋さんの広告が入っていた。
「のり弁」３３０円。
学生時代、「のり弁」にはお世話になった。
昭和６０（１９８５）年、確か「のり弁」は２９０円であった。お金に余裕があるときは、唐揚げ弁当３６０円を食べていたが、お金が苦しいときは、「のり弁」をよく食べたものだ。３０年間、弁当の金額に関しては、それほど変化していないことを実感した。
さて、教育の世界では、将来（国は、具体的には２０３０年を想定している）どのような時代になり、その時代を生きることになる子供たちに、どのような資質・能力をつけておく必要があるのか、が重要になっている。実際、アメリカのある大学では、１０年後に、７０２の職業がコンピュータに取って代わられるという論を公表している。
自分としては、先ほどの弁当の値段や過去３０年間を思い浮かべても、世の中はそれほど多くの変化は実感していない。
コンピュータはあるし、ネットワークやモバイルの初歩もあった。天地がひっくり返るようなことはなかった。
しかし、これらの背後には大きなイノベーションがあったのだと思う。そして、今後１０年間の変化の加速度が、過去３０年の加速度に比べ、想定以上に大きくなっているのだろう。

歴史を振り返ると、明治維新では、欧米の知識を早期に大量に吸収する知育に特化した教育を行った。しかし、早期に方針転換し、徳育重視に舵を切った。（兵士育成に絡む様々な要因があったが・・・。）
また、技術革新においてもトランジスタ増幅回路の知識と実習は欠かせない。チップの構成だけでは、創造は無いと考える。

さあ、どうするか。
私は、「基本の重視」と考える。
社会・自然の基本をしっかり学び、知識を蓄えることである。この知識をもとに、課題を見出し、課題に応じて知識の選択・結合を行える資質を持つことである。そして、そのための訓練は発達段階に応じて必要になる。
アクティブラーニングも、しっかりとした基本を背景に、能動的に対話的に共同的に深く学ぶことができるようになる。
（医者が病名を特定するときも広い知識が基盤となり、議論を行い、特定を目指す。）
一番恐れていることは、基本を十分に身につけないで、様々な形の学びの経験、ドリル的な問題演習を行う学びである。学校を卒業したときに、「活動的だが、実は何もわかっていなかった」が一番恐れていることである。（英語は話せるが、内容が無く、議論にならない事例と同じである。）
いつの時代にもいわれるが、学びにおける「知徳体のバランス」、「基本の取得と基本の活用のバランス」であると思う。
これを実現するために、目標設定とカリキュラムマネジメントが不可欠であり、ますます、学校のミッション認識・設定が重要になる。